

石垣島・石垣市四箇字方言の今と「ユンタ」¹

吉 田 優 子

0. Introduction

先島方言に類別される石垣方言は沖縄県の南西の端、八重山諸島の石垣島、石垣市の方言である。八重山諸島の方言は沖縄本島のいわゆるウチナー口とは語彙、そして文法や音韻も異なり、島ごとの特色が豊かなのはもちろんのこと、石垣市・四箇字の中でも字ごとに発音の違いが細分化されることが古謡の伝承と現地調査によってわかった。石垣市の石垣港付近、いわゆる中心街である四箇字の方言を中心に、今、消滅しつつあるといわれるこの方言から中舌高母音*/i/*がなくなりつつあることと四箇字のうち字登野城においては他の字では観察された [*p*] 音から [*h*] 音への弱化が起こっていないことがわかったのを説明する。同時に、市内中心部でも字ごとに違う発音の細分化が保たれた文化的、社会的背景を辿るのが本稿の目的である。

四箇字の古謡「ユンタ」の由来を検討してみると、集散的に四箇字の、ではなく、四つそれぞれの字を発祥の地とするユンタがある。畑仕事中に掛け合いで歌われたという性質上、地域性を強く反映するものとみなして調べた結果、この比較的小さな区域内での発音のヴァリエーションを垣間見ることができた。

1. 方言の現状

1.1. 石垣の母音体系と変化

沖縄諸方言の母音とアクセントの関連を調べているうちに統率音韻論 (Kaye, Lowenstamm and Vergnaud 1985, 1990, Harris and Lindsey 1995, Charette and Göksel 1996) の立場²から*/i/*, */iː/*, */u/*, */a/*の4つの短母音を持つ石垣方言か

『言語文化』11-4 : 599-616ページ 2009.
同志社大学言語文化学会 ©吉田優子

ら恐らく中舌高母音*/i/*が消滅するのではないかということが予想された (Yoshida 2005)。今回の現地調査 (2008年3月) の目的は、実際に現在希少となってしまうこの方言の話者の中でオーセンティックな発音の記録から変化が見られるか、実際に聞き、録音し、音声分析にかけてみようというものであった。

先にも述べたとおり、石垣方言の母音目録は、短母音が4つ*/i/*, */iː/*, */u/*, */a/*である。4短母音に対応する長母音*/iː/*, */iː/*, */uː/*, */aː/*に加えて、対応する短母音のない*/eː/*, */oː/*も使われる。A, I, Uの三つの「音韻要素 (Phonological Elements)」に分析する統率音韻論の立場からは*/a/*, */i/*, */u/*に関してはそれぞれ(A), (I), (U)の要素の単体での「音韻表現 (Phonological Expressions (PE))」であり、同時に中母音は(A.I)と(A.U)のように要素の複合体での音韻表現であると定義される (Kaye, Lowenstamm and Vergnaud 1985, 1990, Harris and Lindsey 1995, Charette and Göksel 1996, Yoshida 2005)。短母音と長母音の対応を考えたときに中母音に関しては長母音*/eː/*, */oː/*のみ存在し、それに対応する短母音は欠落していることから、石垣方言では時間を表すスケルトンに対し、単一要素からなる音韻表現しか付せられないと言う分析に至った (Yoshida 2005, 2008)。Yoshida (2008) においては同じ理由から複合的音韻表現である*/i/*, すなわち (I.U) という組み合わせは単一のスケルトンには「座りが悪い」ことを指摘し、ともすれば消滅、もしくは発音の変化を示唆した。そこで今回、石垣市の中心部に当たる四箇字に絞って調査を行った。

1.2. 四箇字間の方言差

四箇字 (シカザ/しかあざ)、すなわち石垣市内中心部の隣接しあった四つの字、登野城 (とのしろ)、大川 (おおかわ)、石垣 (いしがき)、新川 (あらかわ) の、港から近く人口密度の高い地域に絞って調査した。この四箇字に絞ったのは、石垣市中心部の方言として同じアクセントパターンを持つと知られているので、この区域内で方言・発音の差が現れることはないという予想から被験者の数を集めやすいと考えたからであったのだが、後に述べる子音 [p] の弱化 (1.3) に関しては意外な事実が判った。実際にデータ読み上げと録音を依頼させていただいたのは、石垣市四箇字で1921年から1933年

の間に出生、その出生した字に現在も在住の男性5名³である。1人だけ字石垣在住の方は31歳から20年間、東京に暮らしていた経歴があるが、他の方々は出生した字に定住であった。中舌高母音/i/が消滅しているという仮説に基づいて、高母音を含み、日常頻繁に使う形態素の介入しない語彙を選出、(1)の例のような2拍語を集めた。石垣方言には短母音/e/と短母音/o/はないので対応する共通語の語彙における/e/と/o/は石垣方言では/i/と/u/にそれぞれ対応する。

(1)	共通語	石垣	
	喉	nodo	nudu
	酒	sake	saki
	風	kaze	kadzi
	人	hito	pītu

結果は予想通り、中舌高母音/i/、「スイ」「シウ」などのようにウ段の音にイを伴ったりイ段の音にウを伴って表記されることに反映されるこの母音は/i/と/u/の中間の音であり、消滅の一途にある。後にも述べる条件下（3.3参照）でのいくつかの例を除いては後母音化が見られた。音響的にフォルマント測定も行ったが、F2値が大きく下がり⁴、後舌母音化を示していた。ほかの地方にももちろん起こっていることだが、「標準語」化が石垣島において進んだ中で、/i/のような「標準語」にない音が消滅することは不思議ではないように思えるが、変化の詳細を見てみると、必ずしも標準語からの影響によって変換されているというわけではなかった（3.3）。

上述の5人のほかに四箇字近辺の字出身の2人に協力をいただき、方言の変化を考える上で大いに参考になった。1人は大浜出身・在住の方で、大浜ではアクセント型が四箇字とは異なる（秋永 1960）ことも報告されている。もう一人は現在においては方言が島の他の地域より健在であると評判の宮良（みやら）⁵出身・在住の方であった。宮良は石垣市からは大浜を越えてその東の地域であり、何よりも大きなヒルギ林の広がる汽水の宮良川で隔てられている。宮良の方言は四箇字とはいろいろな面で異なっているが、若い世代

でも方言使用のある区域での方言の変化は興味深いものであるので、四箇字近隣のデータは比較のためにも、後学のためにも、とデータの読みあげをしていただいた。宮良でも若い世代には/i/の消失が見られることがわかった。更に、よそ、八重山の外から嫁いで来る人にとってはこの音の発音は至難の業である。黄色のことを宮良方言では/kiNki/と言うのだが、なかなか土地の若い世代にもこのオーセンティックな発音が受け継がれず、kuNkuとなってしまうのだと被験者に伺った。大浜に関しては平山（1967）でも/i/の音が保たれていないとの記載がある。

1.3. 子音/p/の弱化

子音に関しては語頭の [p] から [h] へと弱化するものが多く見られ、石垣方言辞典（宮城 2003）によると語によっては浜/pama/~/hama/のように二通りの発音が指摘されているが、これは石垣全域での通時的な変種（平山 1967）の混在だろうか、それとも地域差に因るものだろうか。与那国のように/hasa'N/（鉢）と [h] 音でハ行子音を発音するのに対して石垣島は全般に/pasa'N/（鉢）と [p] 音を使っていた。被験者の読みあげが、例えば「ハナ（花）」であったときに逆に「パナ」とは言えないかどうか確かめるために「パナ」と聞き返してみると「いいえ、ハナです。」という答と共に「パナは登野城の人の言い方だ。」というコメントが来ることがあった。調査で明らかになったのは傾向としては四箇字のなかでも登野城地区では [p] 音の使用が安定している。後に (2.3) 更に考察を深めるが他の字の被験者は [h] 音を使っていた「鉢」/hatsi/を登野城出身の被験者のみが [patsi] と発音していた。

石垣の人々と方言について、とうばらーま大会、古謡、石垣の放送の実態やさまざまな島の話、歴史など何うにつれ言語とその地域性の深いつながりに更に目を向けるに至った。

2. 方言の伝承と字（村）の成り立ち

この現在の石垣方言の比較的狭い地域で隣字とは方言が異なる背景には村（現在は字）が宗教的な理由によって御嶽を中心に成り立っていることがあ

り、農作業などの区域で伝承される労働歌などとの関連も見られる。

2.1. 村の成り立ち

現石垣市中心部にはもともと1675年に天川御嶽を中心とする東の登野城村と、宮島御嶽を中心とする西の石垣村の二村に境界が決められ、人口の増加を理由に1757年、新たに御嶽が登野城村の西部に一箇所、石垣村の西部に一箇所設けられ、それらの御嶽を中心に新たに大川村（登野城村から分割）、新川村（石垣村から分割）ができた（宮良 1973）。こうしてできた四箇村では嫁ぎ先、養子先の御嶽への帰属をすることになるので、村、島を超えて婚姻の可能性のある性、女性は、一つの方言を生涯保っていることが珍しく、被験者は見つけることが難しかった。御嶽への帰属には型があり、八重山離島では個人帰属型が多く、波照間島、竹富島のように実家の者として生れに基づいて決定するので一家に複数の御嶽に帰属するものがあるパターンと、さらに小浜島のように居住規制において決定されるところがある。父系の石垣島四箇村では氏子集団の最小単位が「イエ」であり、本家・分家の関係にかかわらず村の御嶽への帰属が居住規制によって決まる（宮良 1973）。古謡の中の宗教歌、アヨーやジラバはこの御嶽帰属の単位で伝承されるので四箇村での伝承もそれぞれ村単位で行われていたわけである。石垣村に伝わる「ソーソーマ井戸ジラバ」の例を挙げる。表記が文献によって異なるため、以下、古謡の引用でも*/i/*を含む拍は例えば*/si/*を「しう」のようにイ段の仮名と「う」で、*/ti/*, */tu/*, */di/*, */du/*はそれぞれ「てい」「とう」「でい」「どう」と統一する。

じらばがぬ	ジラバガ（小字名）の
そーそーまかーぬ	そーそーま井戸の
うしうでいでー	生れた由来は
なかむらぬ	中の村の
とうしうゆりゃーぬ	年寄りの
くとうばぬ	言葉では

みやとうれぬ かみやまぬ うすばに	宮鳥御嶽の 神山のお側に
みじうぬ ふき かぬ ふき ゆいたて	水の標を 井戸の標を結び立て
ひる なりば ひとつぬ かし あげおーり	昼は 多くの人が掻き出し
ゆる なりば うかみぬ かしおーり	夜になれば 神様が掻き出され
ばげなみじう すりきみじう まらしょーり	湧き水を 清らかな水を誕生させられた
みはだまり なかでいまり いらしうざ	新しい年の生れの者の 中頃の年の生れの者の羨ましさよ
いどうでいめんや みーなでいし いでおーり	外出の時は 身撫で（沐浴）して出て行かれ
いらでいめんや ていすみし いらおーり	帰宅して入る時は 手を洗って入ってこられる
やいまじうま ふりうかぬ はじいまり はじいまり	（これが）八重山島の掘りぬき井戸の 始まりです 始まりです

（沖縄の古謡 八重山諸島編上巻 一石垣島一）

宮鳥御嶽とは字石垣の住人の帰属する御嶽であるが、この御嶽と縁の聖なる

井戸は神・人一体となつての創建であると讃えている。このジラバは正月願いや弥勒節などに唄うのが慣例であり、宗教儀式、祭りには村全体が関わっていた。自然にこのようなジラバやアヨーも祭りの主導者のみならず個人がしっかり歌えるものであり、すなわち宗教歌は御嶽帰属の単位で伝承される方言を伝える一つの要素であった。

2.2. 畑仕事と唄、特にユンタについて

士族の三線を用いた節歌とは異なり、日々の農民の生活の場で伴奏なしに唄われるユンタとはユイ（結い）共同体での音頭とりをするような労働歌である。20世紀初めまで琉球王府以来の政策であった世界的にも悪名高い八重山の人頭税制が続いたので、家庭は経済的に圧迫され、婚礼の宴なども簡単に済ませていた⁶という過酷な状況を乗り切るためにユンタの果たした役目はとても大きい。1637年から1903年まで15歳から50歳までの個人に課された人頭税は重税であり、納税のためには生産性を上げなくてはならなかった。一年中休むことのない重労働が要求される中、特にユンタ、そしてリズムの良いジラバが農作業中に一日の仕事のペースの移り変わりや作業にあわせて工夫がなされ唄われた（波照間 2008）。1922年の状況としては石垣島には農作業と共に唄声が響いていたという（田辺 1923）。丁度今回の被験者の幼い頃には作業場や田畑には唄声が響いていたわけで、いまだに行事ごとに古謡を唄うという方が多かった。その後10年あまりで状況は大きく変わってしまった。1936年には県下学校長会においても「県下の状況に鑑み標準語を一層普及徹底せしむる具体的法案如何」に対して審議がなされ、学校からの標準語励行運動が始まった（石堂 2004）。1941年の国民学校発足後、第二次世界大戦下、沖縄に対する皇民化教育は徹底され、古謡の伝承は更に難しくなる。今現在も節歌として残っているユンタは、人気の高いユンタに三線の伴奏をつけ、節回しや歌詞を変えて広まっていたものである。

ユンタとしてよく知られているものには石垣島から最も近い小さな島、竹富島の「安里屋ユンタ」がある。最近では坂本龍一のアレンジでも知られる先島の「民謡」ということになるのだが、もとはといえば仕事をしながら男女の掛け合いでうたうユンタで、節回しも歌詞も異なっている。八重山島民

謡を蘇生させ全国にその芸術的価値を知らしめるために新たに昭和9年に作詞された「新安里屋ユンタ」が一般化（喜舎場 1977）して、更に近年のミュージシャン達の目にとまったことにより沖縄の歌として全国的に有名になった。クヤマという絶世の美女がお役人の旅妻になることを拒んだというストーリーは残しながらも素朴な声だけの掛け合い唄の雰囲気は一転している。

民謡のタイトルにも発音の変化が伺われる。字大川に伝承される「鶯ユンタ」が元となる、その縁起の良い歌詞のために石垣島全体に広められた唄、「鶯ぬ鳥節」である。大川の「鶯ぬ鳥」が正しく発音できるかどうか、石垣市の若い世代には難題となりつつある。いまや「鶯ぬ鳥/basinuturi/節」は石垣島では祝宴の席には欠かせない代表的民謡であり、若い人々がこのタイトルの中に二度現れる/i/をうまく発音できないということも今回、石垣市の言語調査にご協力くださった被験者の方々の話題に何度も上った。というのも調査のテーマが中舌高母音/i/であり、読み上げて頂いた語彙リストには「鳥」/turi/が含まれていたからである。

ユンタとは農作業などの間に唄うものであったため、特に人頭税が廃止されるまでは、区画の決められた畑仕事の中で唄われていたこともあり、地域方言色を色濃く反映するものである。四箇字に伝わる労働歌を個別に検討すると、新川の「網張ぬみだがーまユンタ」、石垣の「不寝ぬ親ユンタ」、大川の「鶯ユンタ」や「山原ユンタ」、登野城の「あがるーざユンタ」「古見の浦ユンタ」と、いくつか挙げられる。このうち石垣島全体に広まり、各地で抜粋する部分が変わっていたりもするが、その土地の発音を反映しながら伝承されているので、その字発祥のユンタのみならず広範囲に広まったものを比較してみると興味深い。

ここでは「浜下り」という語を使った二つのユンタを大川の伝承と登野城の伝承で比較する。ひとつは猫ユンタ(マヤユンタ)として石垣全域に広がっている（発祥地は石垣市新川）ものが登野城では「ザーラ岳ユンタ」という歌いだしの節をそのまま取ったタイトルで伝承され、登野城ユンタ保存会に記録されている。もうひとつは山原ユンタというこれも各地で伝承にはヴァリエティーが見られるようだが、ここでは発祥地の大川での伝承を大川ユン

タ保存会が記録したものを抜粋する。

ザーラ岳ユンタ（部分）

ざーらだぎぬ あしうなが	ザラ岳の 麓に
まやぬふあーば なしだきうりーどう	猫の子を 産み抱いており
なゆぬぴうーどう うりうとうりむちうなしう	何の日に これ（子猫）を移動する
きうにとうらーぬ かにぬぴうーどう	甲寅の 庚の日に（移動する）
やんさすーぬ ぴうしうちうきはば	（夜半）の大潮が 引ききったら
あさりうぐじう とうりうむち	アサリ（漁）道具を 取り持ち
かたばりうぬ <u>ばまうり</u> しーどう	潟原（地名）に 浜下りして
みゆとうたくぬ ぴうりうりうりどう	夫婦蛸が 座っていたので
みゆとうたくば とうりおーり	夫婦蛸を 取って来て

以下略

(登野城村古謡集 (第一集))

第7節にある登野城の「浜下り」は/pamauri/である。さて、250年前までは同一の村の一部であった隣の字、大川ではどうだろうか。

山原ユンタ

やまばれーぬ しうくぬやーぬ ぬずぎゃーまー	山原の宿の家 (宿駅) の ヌズギャーマ (乙女の名)
みやらびぬ あふありふあーぬ まりそーや	女童が 綺麗な子が 生まれているよ
いみしゃから すらすらぬ まりばし	幼いときから 美しい 生まれであった
くゆさから <u>へがへがぬ</u> まりばし	小さいときから 派手やかな 生れであった
あんだぎなーぬ とおかみーかぬ ちうくいぬゆー	あれほどに照り輝く 13日の月夜だよ
くりふどうぬ じゅんぐにちいぬ ちいくいぬゆー	これほどに明るい 15日の月夜だよ
はりいまーざーぎどう <u>はまうれーし</u> あさぶさ	ハリマ蟹でさえ 浜下りして遊ぶはずだよ
がすめーざーぎどう	ガサミ蟹でさえも

ゆに わたり あさぶさ 砂州に渡って遊ぶはずだよ

ばがけーらん (男) 私たち皆も

はまうれーし あさびょーら 浜下りして遊ぼうよ

ゆすけーらん (女) 私たち皆も

ゆに わたり あさびょーら 砂州に渡って遊ぼうよ

以下略

(沖縄の古謡 八重山諸島編上巻 一石垣島一)

ここでは活用されているが、登野城では/pamauri/であるのに対して大川では/hamauri/であることが判る。浜下り、すなわち海辺へ行って遊ぶことであるが、正式には3月3日に女子が厄払いのため、潮干狩り遊びに浜へ行くことの意がもとで、葬儀などの後に身を清めることも意味する。山原ユンタからわかるように芝遊び(モウアスピ)は十五夜の夜に若い男女が楽器や食べ物を持って野遊びに出ることも意味する。このパマウリ/ハマウリの項目も宮城(2003)では同様の意味を指すと記述があるが、地域差についての記載はない。第4節に「へがへがぬ」とあるが、この山原ユンタを登野城ユンタ保存会が記録しているものによると「ぺかぺかぬ」となっている。この二語の例から字大川では少なくともユンタの伝承においては登野城では[p]音として伝わっているものが[h]音で伝わっていることが判る。残念ながら他の部分は節の選抜や節回し、語彙の違いのために全体を対照することはできない。

2.3. 四箇字の [p] 音と [h] 音に関する調査結果と考察

四箇字の語頭に於ける [p] 音の現時点でのデータを整理し、考察をする。東から登野城、大川、石垣、新川と四箇字が並ぶ。この4地域での [p] 音と [h] 音の使用の例を示す。

	登野城	大川	石垣	新川
鉢 patsi	patsi	hatsi	hatsu	hatsi
暇 pīma	pīma	pīma	hīma	hīma
足 paŋ	paŋ	paŋ	haŋ	haŋ
人 pītu	pītu	pītu	pītu	putu

登野城の被験者（1925年生れ）は4語とも [p] 音を使用している。石垣（1933年生れ）、新川の被験者2人（1926年生れ・1929年生れ）は「人」以外では [p] 音を使用していない。大川（1927年生れ）の被験者の記録では、この4語のうちで3語も [p] 音使用が見られる。前セクションで見た大川のユンタ伝承における状況とは違っているのは、この被験者の年齢と通っていた小学校の学区の影響と考える。現在もそうであるように、登野城と大川の子供達は登野城小学校に通う。大川の被験者は1927年生れで標準語励行運動が学校に波及した9歳までに登野城小学校で登野城の発音の影響を受けている。その後の学校における方言使用は禁じられているのでこの方の学校で受ける方言の影響は9歳までである。今後、さらにユンタの伝承における発音と被験者の発音の差や年代差を調べて統計をとる必要があるので、更に被験者を増やして調査するという課題がここに残ることを示しておく。

3. 内地化と「標準語」励行——方言が消えていった背景——

3.1. 標準語励行

沖縄では1880年の近代学校の発足から、皇民化という名目で方言の使用をつつしみ、標準語使用を励行する動きが強まった（梶村 2006）。前述の標準語励行運動によって石垣においても昭和11年以降生まれの石垣島住民には方言の使用があまり見られない。今回の方言調査の中でも昭和2年（西暦1927年）生まれの被験者においても既に語彙に標準語の語彙の混入が多く見られた。学校は方言使用を厳しく禁じ、方言札を用いて律していたが、そこは子供達のこと、しっかりここからゲームを作り出すのだった。人間とはとっさの眩き、叫びには反射的に一番身近な言語が飛び出るもので、外国語習得の場合を考えてもかなり流暢にその外国語を操る話者でも感嘆の語などであれ

ば、突然母語が飛び出てくることがよくある。様々なゲームが繰り返され続けているようではあるが、例えば方言を使った罰則に首から下げている方言札を後ろから他の子が忍び寄ってその紐をいきなり引っ張ると、どうしても「アガー！（いたい！）」と叫んでしまうので、また方言を使ったとして同じ子が罰せられる。そうするとその子がいつまで経っても方言札から逃れられないことになってしまうというものである。このように面白おかしく方言札のことを語ってくれる人もいるけれども、もちろん心の傷を数多くの子供達に残してしまったことも強調して述べておかなければならない。

教育政策的要因と共に島の産業の変化に由来する標準語の必要性もすでに根を張っていた。より安定した良質の輸出品の開発を求めて内地の製糖会社が沖縄でのサトウキビ（シツァー）の発育のよさに着眼し、大掛かりな栽培と圧搾に乗り出した。内地化が石垣島を含む八重山全体の開墾、サトウキビの栽培の規模の拡大につれて、内地人とコミュニケーションを取る必要性が出てくる。

畑作においても農業以外の産業に従事する人も増え（宮良 1973）、機械化が進むにつれユンタを歌いながらの畑仕事風景は戦後復興から時を経て見られなくなっている。

3.2. 敬語表現の伝授の難しさ

方言の伝承に関してもう一つ被験者の方から伺ったのは、孫や島の子供達に方言を伝えようと方言で話しかけた場合、子供達に理解はできても方言を使って答えてくれない、という問題があった。方言を使おうとしてもこの祖父・祖母世代の目下に向けた発話をモデルに習得することになってしまい、目上への敬語表現のモデルがないからである。それはもちろんこの孫達の親世代、すなわち被験者にとっては子の世代が方言使用者ではないので、孫達は親の使う方言による敬語表現を聞くこともないということである。被験者より少し若い世代、昭和二桁代（1936以降生まれ）の年代に突入すると標準語励行のポリシーのなかで教育を受けたり、もしくは台湾で育ち、日本学校に通い標準語教育を受けた方言を使用しない世代であり、被験者の子の世代は家でも地域社会でも目上の人々に方言の敬語使用をすることがないので子

供達には親をモデルとして敬語表現を学ぶ機会はどこにもない。

敬語を習得する場としてももう一つ考えられるのは宗教行事であろう。先に「ソーソーマ井戸ジラバ」でも神を讃える唄であると記したが、ジラバやアヨーのような宗教歌には様々な敬語表現が使われる。もちろん祭りへの関与が内地化の進む前程度に頻繁で深いものであればこのような宗教歌も敬語の習得に寄与できていたであろうと思われる。しかし農業以外の産業に従事する人の割合が増えるにつれて、これによって御嶽への帰属意識も薄らいでいったので、年一回の豊年祭も村の行事として一体になって参加していたころとは変わってしまっていて参加者と観客は分離(宮良 1973)してしまっている。そうすると若い世代には受身的にジラバやアヨーを聞くことにはなるが、自ら唄うところに至らず、敬語を習得する機会とはなり難い。

3.3 方言内部の変化

このように「標準語化」が進んだ中、先ほど述べた/i/から [u] への発音の変化などは単に標準語語彙からの影響で起こっているとも考えられる。発音の変化の例を少し、共通語の対応をつけてここに挙げる。

(2)	石垣	新石垣	共通語
壺	tsĩbu	tsubu	tsubo
爪	tsĩmi	tsumi	tsume
竜	tatsĩ	tatsu	tatsu
夜	ju:ri	ju:ru	joru

(2)に挙げた例では単に共通語の影響として発音の変化が起こっているようにみえる。しかし次の(3)に挙げる例は同様ではない。共通語において対応語彙が/i/の例を次に見る。

(3)	石垣	新石垣	共通語
内	utsĩ	utsu	utʃi
口	Φutsĩ	Φutsu	kutʃi

鳥	tíru	turu	tori
人	pítu	pítu~putu	cito

鳥「とり」にあたる「とうるい [tuɾi]」は「とうる [turu]」と、標準語からの影響で第二母音が変わっているとすれば [i] の音になるべきものが、実際は後ろよりの [u] となっていることが確認できた。共通語では [i] に対応するところが新石垣では [u] となっていることから、単なる共通語の影響ではないことが判る。

人「ひと」のデータは [p] 音が保たれている語の例として2.3節でも出てきている。この語の/i/には字による発音の違い（もしくは個人差）が出ているが、他の語と比べて複合語の後部要素として [p] 音の定着したかたちで、そして単体でも使用頻度が高いと考えられる。

4. 方言のこれから

方言で話せるという自覚のある人の数も減ってきてしまっている今、文化遺産としての古謡を効率的な方法で伝承する必要がある。字ごとにユンタ保存会や古謡保存会も定着しつつある。今後、字の保存会単位で伝承の仕方にさらにヴァリエティーが生れてくるかもしれない。沖縄の民謡も新しい音楽形式との融合を楽しんでいる。インフラも整い、人々の行動範囲の広がった世の中で農耕社会だった頃のようなユンタの伝承はできなくなっているが、逆に録音機器と録音形式の改良とともに新しい伝承の仕方も編み出されることを期待したい。

註

- 1 本稿の執筆に当たって、石垣市現地での方言調査にあたって長い語彙リストを読み上げて頂き、また文化背景に関して様々なお話を伺い、ご協力を賜った片桐政宏様、慶田盛信吉様、崎枝孫雄様、照屋玄様、仲大底安伸様、宮良信男様（五十音順）にお礼を申し上げます。松原秀吉様は語彙リストの読みあげのあと、自作の「とうばらーま」もご披露下さったことに感謝を申し上げます。鳥と鳥の言葉

を愛し、その保存には努力を惜しまない、そしてとても心の暖かい石垣島の方達ならではのご好意である。また、島について広く情報をくださった西表すゑ様、東黒島優美子様に深く心から感謝を申し上げます。貴重なコメントを頂いた査読者に深く御礼申し上げる。

- 2 統率音韻論 (Government Phonology) ではエレメント個体、もしくは互いに認可関係によって組み合わせられた複数のエレメントが言語固有の認可制約を用いてその言語、または方言の中の音体系を表現する。
- 3 女性被験者がいなかったことについては2.1参照。
- 4 音声分析ソフトPraatにより、wav方式に録音したデータを分析し、そのF2値を調べた。F2値は一般に後舌母音で低くなる。詳しい値に関してはここでは言及しないが、概ね典型的な/i/では1400~1500 Hertz あたりであるのに対し、/u/では1100 Hertzあたりだが、伝統的に/i/音で発音されていたものが1200 Hertzぐらいに低くなり/u/に近づいている。
- 5 1960年頃においてはアクセント型においては他の石垣の字よりも方言の揺れの大きいところであった (秋永1960)。
- 6 これには親が決める縁組から本人同士の決定によって親が後から認める形の婚姻の増加も要因となっている (喜舎場1977)。

参考文献

- 秋永一枝 (1960) 『八重山方言1・2音節名詞のアクセントの傾向』「国語学」41集。
- Charette, Monik and Asli Göksel (1996) Licensing constraints and vowel harmony in Turkic languages. *SOAS Working Papers in Linguistics* 6: 1-25.
- Harris, John and Geoff Lindsey (1995) The elements of phonological representation. In: J. Durand & F. Katamba (eds.), *Frontiers of Phonology, Atoms, structures, derivations*. Longman.
- 波照間永吉 (2008) 『八重山の古謡』「沖縄の古謡 八重山諸島編上巻—石垣島—」沖縄県文化振興会。
- 平山輝男 (1967) 「琉球先島方言の総合的研究」明治書院。
- 石堂徳一 (2004) 『八重山の戦争と皇民化教育』「八重山歴史読本」南山舎。
- 石垣繁 (1991) 「登野城村古謡集 (第一集)」登野城ユンタ保存会。
- 梶村光郎 (2006) 『沖縄の標準語教育史研究』「琉球大学教育学部紀要」68。
- Kaye, Jonathan, Jean Lowenstamm and Jean-Roger Vergnaud (1985) 'The internal structure of phonological representations: a theory of charm and Government'. *Phonology Yearbook* 2: 305-328.
- Kaye, Jonathan, Jean Lowenstamm and Jean.-Roger Vergnaud (1990) Constituent structure

- and government in phonology. *Phonology* 7: 193-231.
- 宮城信勇 (2003) 「石垣方言辞典」 沖縄タイムス社.
- 宮良高弘 (1973) 『祭祀組織と村落の構造』 「八重山の社会と文化」 木耳社.
- 喜舎場永珣 (1977) 「八重山民俗誌 (上・下巻)」 沖縄タイムス社.
- 田辺尚雄 (1923) 『第一音楽紀行』 文化生活研究会pp.231-232.
- Yoshida, Yuko Z. (2005) Quality-Sensitive Accents in the Tokyo, Kyoto & Ryukyu Dialects. Hertford College, Oxford University.
- Yoshida, Yuko Z. (2008) Predictable Change in Pronunciation—Disappearing /i/ in the Ishigaki Dialect—. Linguistic Association of Great Britain Meeting 2008, University of Essex.

The Disappearing /i/ and Lenition of /p/ in the Ishigaki Dialect: Fieldwork on the “Island of Songs”

Yuko Z. YOSHIDA

Keywords: the Ishigaki Dialect, dialectal variation, fieldwork, religious and farming community, folk songs

Reported here are some recent changes of the pronunciation in the Ishigaki dialect, along with their social and cultural background, based on the recently collected set of data from the author’s fieldwork on the Ishigaki Island.

The initial part of the paper reports some changes in the dialect of Ishigaki city centre, and some theoretical implications. The element theory (Kaye, Lowenstamm and Vergnaud 1985, 1990, Charette and Göksel 1996) employed here treats phonological segments as Phonological Expressions (PEs), simplex or complex forms of three universally fixed Phonological

Elements, A, I and U. The lack of short mid vowels in the dialect, /e/ and /o/, whose PEs are (A.I) and (A.U) respectively, implies that a complex PE can not be accommodated within a single timing slot. This vein of analysis hints at an uncertain future for the short central high vowel /i/, comprising two elements, (I.U): field research results attested the unstable status of /i/, from the acoustic analysis of the vowel in question.

The dialectal variation of each village in the central area of Ishigaki city had been diversified or preserved in tandem with the religious and farming community of the village in question. Ishigaki Island has always been referred to as an “island of songs”; yet the current situation is quite different from the pre-war period when folk songs were thriving as a crucial part of the lives of inhabitants. *Yunta* was playing a key role to help men and women of the village community work efficiently on the farm throughout the day when they were overwhelmed by heavy poll tax. It was with sacred songs, *Ayo* and *Jiraba*, that people of the village were all active participants in, rather than mere spectators of, the festivals centering around the village shrine. The pronunciation of those songs handed down reflects the locality of the village community.